虹色人生の先達が、次世代（若者）＆北海道に、
心に響く究極のメッセージを送る！　一人2回連載。

「北海道の同人雑誌の灯りを守る」

田中　和夫
（作家・札幌文学会代表）

田中 和夫
（たなか かずお）
1933年 江別市生まれ。
江別高校卒業。国鉄札幌車掌区、車掌長で国鉄退職。高校時代から小説・戯曲を書く。1982年、小説「残響」で道新文学賞。1987年、北海道文化奨励賞。

文芸同人雑誌とは、文芸愛好者が資金を出して作品を発表する「表現の場」である。戦前のことは詳しくないが、戦後は全国的な文学活動期が始まり、北海道でも文芸同人雑誌の創刊が相次いだ。

戦後の北海道の同人雑誌創刊第1号は編集・発行所を北見市に置く「私たち」で、昭和二十年十二月五日の発行。一二二頁、二〇〇部印刷の同誌は発売後、即売り切れ。続く第2号は帯広で発行された「凍原」。創刊号は小説、随筆、詩、短歌、俳句などを盛り込んだ文芸誌の形態で北見の「私たち」より十日遅れの十二月十五日の発行。こちらは鉄道弘済会を通じて全国の駅売店や書店に送られた。一〇〇〇部、八四頁で、地元帯広市内の書店では発売三〇分で売り切れたという。この「凍原」はのちに札幌に移り、随筆誌「北の話」となった。帯広からは同じ歳末近く「北方新思潮」が出ている。年が明けると旭川から「冬濤」。続いて室蘭から「室蘭文学」、札幌から「限界」、倶知安から「人間像」などが用紙統制時代の悪条件の中から創刊された。

このように、戦後間もない昭和二十年から五年の間に創刊された北海道の文芸同人雑誌はざっと数えて五二誌。その中の「札幌文学」の創刊は昭和二十五年一月。すでに創刊七十一年となり、現在九一号発行の誌歴を持つ道内一の老舗である。

実は、私は1965年（昭和四十年）札幌文学会に入会し作品を掲載。第五六号から編集に携わっている。その立場から記述を進めたいと思うのでご容赦のほどをお願いしたい。

創刊時の札幌文学の同人は一三名で、特に文学的な主義主張は持たず、何の拘束もなく発表させるという編集方針だった。だが、「中央文壇と繋がりを持ったなかで次々と同人を押し上げるべき」とする主張と「文学的に荒蕪の土地である本道に肥料を施す役目を果たせばよい」とする意見が合わず、第二号発行の前に脱退する者が続出した。一時的とはいえ継続が危ぶまれた札幌文学だったが、第一〇号以降は沢田誠一が実質的な発行責任者となり、札幌文学を育てあげた。その澤田誠一は再刊一〇号の後記に次のように書いている。

「北海道で文学するものには避けられない存命的に意識されているものでありたい」

これ以後、札幌文学を足場に中央文壇への進出を果たした人を含め、西田喜代司、八重樫実、木村不二男、橋崎政、真崎晋吾、梅田昌志郎、中沢茂、山田昭夫、上西晴治、小桧山博など様々な人物が足跡を残し、北海道を描く担い手としての不動の場を築き上げた。

札幌文学の年二回発行は不定期だが第三九号まで続いた。昭和四〇年代である。釧路の「北海文学」連載の原田康子の「挽歌」が女流文学賞を受賞し、さらに映画化されたのは昭和三〇年代だが、これが機となったのか同人誌ブームが全国的に興った。おおざっぱな数え方だが昭和三〇年代から五〇年代にかけての道内の同人雑誌の創刊は、一三〇を超えている。さらに地方自治体による市民文芸誌も五十四、五誌は出ているらしい。

だが時代は急速にデジタル化しつつ進む。いつのころからか活字離れが進み、新聞購読者の激減、文芸出版物の不振、書店の激減―。

そして同人の高齢化による同人雑誌の廃刊、印刷費用の負担増による休刊・廃刊―。

十五年ほど前、私どもは「実力ある同人の発表の場」という編集方針を「文学を志す新人に広く門戸を開いて作品を発表」に改めた。その故か、男性中心だった札幌文学は一挙に女性同人が加わって彩り豊かな文芸同人誌に変貌した。これも同人雑誌の裾野を広げ、新しい方向に進む発展の一つの道だと確信する。

これもまた古い話だが、十年前の春、札幌地方同人雑誌懇話会を立ち上げた。やがては北海道内の同人誌間の交流を図り、それをバネに互いの活性化を図りながら継続発行を願う企画だった。参加は札幌圏一八誌で、回を重ねるごとに参加が増え、翌年には「札幌地方同人雑誌作品選集（第一集）」を刊行。紀伊国屋書店札幌駅前本店ギャラリーでの「同人雑誌フェスティバル」も大入りで成功した。さらにその翌年、「札幌地方」を「北海道」に改め「第二集」を刊行した。

若年層はもちろん、小説を書きたいと願う人をどこの同人雑誌も待ち受けている。「北海道の同人雑誌の灯りを守る」私どもの強靭な信念は、今も、これからも決して崩れない。

★提言：変革、多様性を恐れず、何ごとも常に「前へ！」という次世代への「タスキのつなぎ方」の哲学が重要である。　本誌編集長　佐藤　公